



東西南北それぞれ16kmの巨大な地図にとらめっこで周り方を考える。最後はエイヤとなるのだが、まだまだ改善の余地はある。

競技時間 24時間のロゲイニング世界選手権。出場したTeam 阿闍梨の村越真と田島利佳がレースを振り返る。

2014年8月16-17日 アメリカ
ロゲイニング世界選手権大会

いつもの興奮

先週引越して、その片付けやら新しい生活に慣れないやらで、疲労が残っている。遠征に伴う興奮も、心地よいものを感じられなかった。吐き気の一手前。交感神経の興奮の仕業なのだろう。

到着した翌日、暇な時間を使って、過去の世界選手権の記録をまとめてみる。二回の大会のトレインの性質は異なっているが、いずれも最初の6時間は概ね時速4.5km、その後夜間に約4kmに落ち、最後の6時間は概ね時速3kmだ。驚くほど一致している。今年はパートナーの田島のトレーニング量も十

分ではない。トータルで80kmが目標だろう。

ロゲイニングの要、作戦

8月16日、8:30に会場に着くと、すでに開会式は始まっていた。スタートは12時だが、地図配布は9:30。作戦を立てる時間が2:30もあるのだ。

過去の経験から、前半12~14時間でハッシュハウス(エイド)に戻るループ、その後少し休んで後半10~8時間程度のループで回る予定でプランを立てる。配点を見ると、北東、西側と多いが、北東が回りやすいことを考えると後半にとっておきたい。結果的に西側に展開するのがよさそうということになった。

考える時間はたっぷりある。煮詰まると周りのチームの様子を偵察に行く。プランニング最後の段階で、最初のエイドは早めに通ることにして、スタート時の水分保持量を減らすことにした。何しろ最高気温は30度なのだ。熱中症を懸念すると、ウォーターステーションで定期的に水分を補給し、荷物の量

を抑えるのが有効な戦術だ。

朝三暮四

最初のエイドまで約3.5時間で予定通りの進行となった。しかし、その後せいぜい8-9時間でハッシュハウスに戻るつもりだったのだが、西側の急斜面で予想以上に時間がかかってしまった。おまけに中程を取り尽くして西側から南側に回ったので、それ以上ルートを短縮することもできず、水分とカロリー不足に不安を抱きながら、朝とも言える4:20分になってようやくハッシュハウスに着く羽目になった。最後の9kmはほとんどロード。取れた点数も、40点のみ。後から考えると、後半の得点効率が全く悪かった。前半の高得点に目がくらんで、そこまで考えられなかったのだ。まるで朝三暮四のサルなみだ。夜間、歩きやすい道路を歩いて距離を稼ぐというのは悪い戦略ではなかったかもしれない。

夜への誘い

日が暮れてからハッシュハウスに着くまでの約8時間がナイトナビゲーションとなる。アドベンチャーレースからロゲイニングまで、多くのナイトナビゲーションを経験しているが、何度やっても怖い。

もともとロゲイニングのCP位置は大きな地形上に置かれている。しかし、0-mapのように藪も描いていなければ、等高線間隔も10mで非常に大まかな地形しか表現されていない。しかも、与えられた地図では読み切れない小さな複数の地形の中の一つにCPが置かれていたりする。これまでの2回以上に「嗅覚」が必要であった。尾根も幅が広いものも多く、注意を必要とした。さらに夜になると、一端ロストしたら、ヘッドライトの限られた情報では、リロケートするに必要な情報を得ることは難しい。その恐怖が、精緻なナビゲーションへと駆り立てる。確実に分かるルートを取る、エイミングオフなどのプランを工夫しつつ、「一撃必殺」を心がける。一撃で仕留めなければこっちが「大けが」をするのだ。

暗くて目印のほとんど使えないナビゲーションをしていると、マイクロネシアのカヌイストたちのナビゲーションに思いが馳せる。彼らは島影も見えない海原を数百kmにわたって航海す

る。その方法の根幹にあるのはスターコンパスという星（の昇り、沈む方向）によるコンパスだが、もう一つ重要な概念装置にプープナパプナがある。これは実在する（あるいはしない！）島によってルートを囲い、その中を自分達が移動しているという考え方である。囲われていると認識できるからこそ、囲いそのものが見えなくても極度の不安に陥ることなく移動できる。気づくと、私もそうやって不安に対抗していたのだ。

たとえば74から脱出方向にある道に向かう時、どこにいるかほとんど分からなかった。それでも不安なく進むことができたのは、進路が谷であり、谷筋そのものが確実に見えなくても、左右に登りすぎないかぎり、谷を左右に取り囲む尾根の中におり、進路の先には進路と直交する方向に伸びる道があり、これら3つの要素によってルートが囲まれていた、いや「囲まれている」と信じることができたからだ。



日本のエース茂木・海者チーム。日の丸とつけての参加だったが、初の24時間Oゲイニングで、大雑把な地形図、夜の洗礼にあって撃沈。

24時間のご褒美

24時間戦ったご褒美を自分たちは得ることができたのだろうか。二人とも40歳を超えている僕たちのチームはミックスベテランだ。ミックスベテラン上位3チームは全リザルトの中でも3, 5, 7位を占める強豪そろい。その中で2330点の7位。世界で7位。そう思うと悪くない結果に思える。

だが、男子スーパーベテランでは2700点台のチームがいる。彼らの周りの方を見ると、私たちよりも遙かに少ない距離ながら、300点以上多い得点を挙げている。周り方についての作戦決定については、まだまだ検討の余地がありそうだ。

多くのポイントを効率よく回るルートを考えるというのは、「巡回セールスマン問題」として、人工知能の難問の一つでもある。それを限られた時間で見つけ出す人間ならではのヒューリスティックスを見つめることができたら、

楽しいだろうと思う。勤務校の学校評議員の方が「仕事のご褒美はより次元の高い仕事」と名言をのたまわった。こうして見つけた課題が、今回のご褒美かもしれない。

成績

1	4040点	Estonian ACE Adventure Team
38	2320点	Team 阿闍梨 (ミックスベテラン 7位)
77	1860点	クロマニオンズ (男子オープン 41位)
135	1240点	グリーントライアングル (ミックスオープン 60位)
136	1220点	もんもんクラブ (男子オープン 60位)



1983年以来的の盟友シャロン・クロフォードは、スキーOであったり、トレイルOの会場であったり、そして近年は毎回Oゲイニングの会場であつた。御年70歳のチャーミングなアメリカン。

参考資料①食料

前半の食料は、いかくん、柿ピー(400kcal)、ジェル2個(360kcal)、コンデンスミルク1本(350kcal)、バー4本(約700kcal)、ミニマフィン3個(300kcal)を持った。

行動中の全食料は、山本先生の公式を参考に、1時間あたりの消費カロリーが300kcalと考え、24時間で約6000kcal強と考えた。行動中およびHH(ハッシュハウス:エイドステーションのようなもの)での摂取でその半分程度をカバーすることを目標に上記の食料を持った。前半の行動時間が16時間を超えてしまったので、ぎりぎりだった。田島からα米をもらって、最後の空腹をしのいだ(このペースならそれほど空腹感も強くなかった)。

水は最初のウォーターステーションまで2L持った。かなり暑く積極的に飲んだつもりだったが、900mlほどしか使わず。その後は無給水の懸念があったので、ハイドレーションはぱんぱん2Lとボトルにゲータレード700mLを1本を持ったが、夜になったこともあって、ほぼ2Lの消費に収まった。

ハッシュハウスでは、パスタ軽く一皿、シーフードヌードル半分、ポテトサラダドッグ2本。これは余ったポテトサラダで急遽自家製。行動食はどうしても人工的な食品になるが、やはりいつでもおなかに入るのは、こうした自然食品だ。全部でたぶん1000kcalくらいを胃に収める。

後半のループは6時過ぎにスタート。残り約5時間半。食料は、バー2本とドッグパンに作ったサンドイッチ2本。これで十分だった。水分は700ml程度の消費。思いつきり薄くしたスポーツドリンクは疲れてくると悪くない。水が飲めなくても入るかもしれない。



レース後に日本からの参加者で作戦検討。悔しさとともに、くつろぎの時間でもある。

参考資料②装備

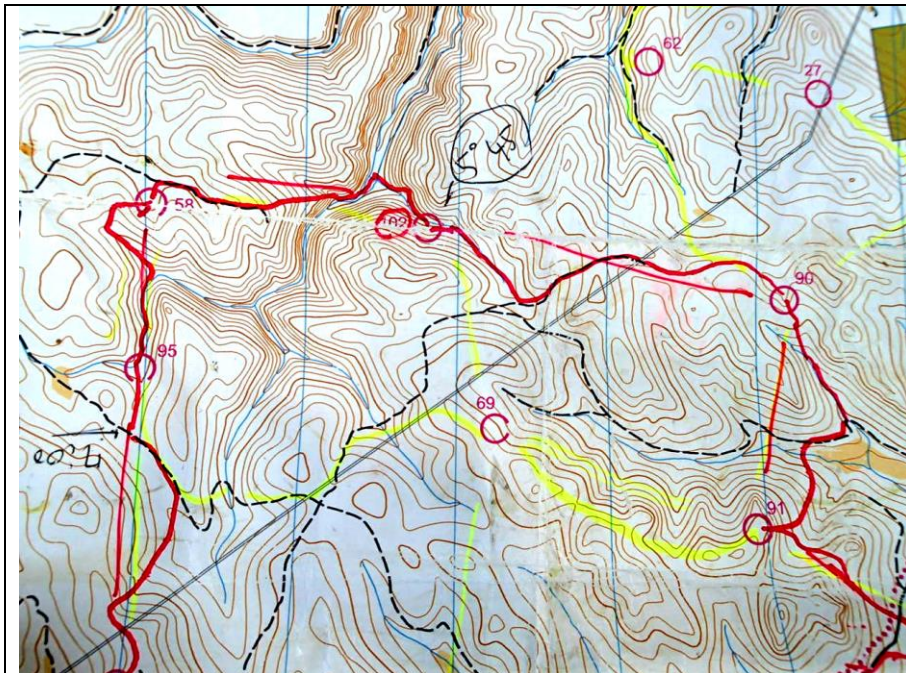
一時的な雷雨の可能性があることを除けば、連続降雨はないことが予想されたので、ウェアは最小限にした。スタート時に来ていたのは、ラビッドシャツ半袖(Trimtex社。速乾性があり涼しいが、寒くなりやすい)。下は長タイツ。それに薄手のウィンドブレーカー、長袖で織りのあるアンダー用ポリシャツ(Craft社性)、ゴアのアクティブシェル上のみ(下は、ザックの重さに抵抗感を感じて、スタート直前においていくことに決めた)。それにバフ。暑いので手ぬぐいを帽子代わりにした。

夕方からウィンドブレーカーを着た。さらに寒くなったので、下に長袖ポリシャツを着た。日が変わった最後の3時間くらいはそれでも寒く、ウィンドブレーカーをアクティブシェルに代えた。これで動いている限り寒さは感じなかった。夜は手ぬぐいをバフに代えた。

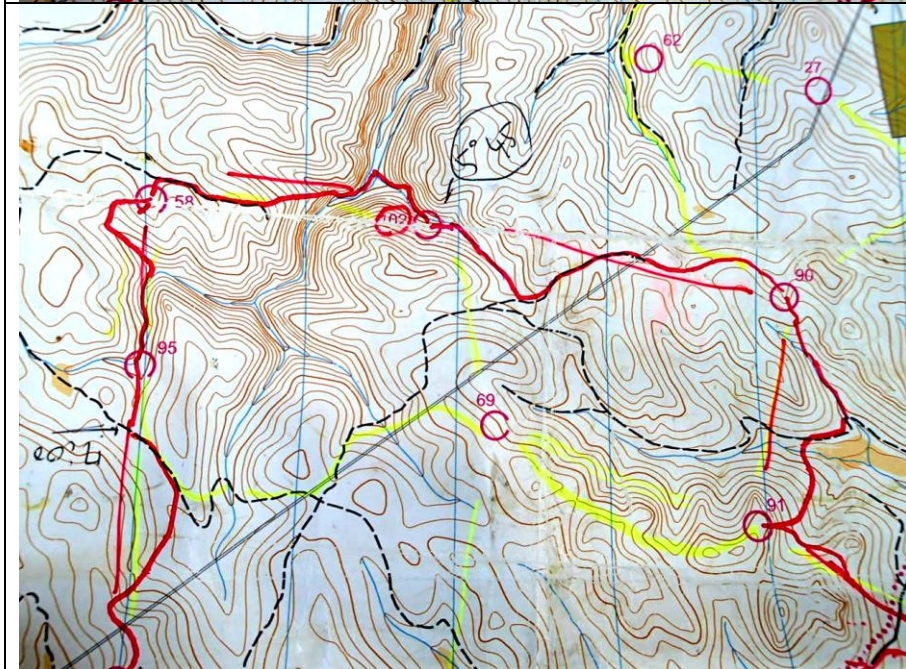
気温は日中26度で、日なたでの実際の温度は30度くらいだろう。夜はたぶん15度以下(息が白くなる程度で、手先も寒い)が我慢できる程度。

2周目のスタート時は、日の出間近で。

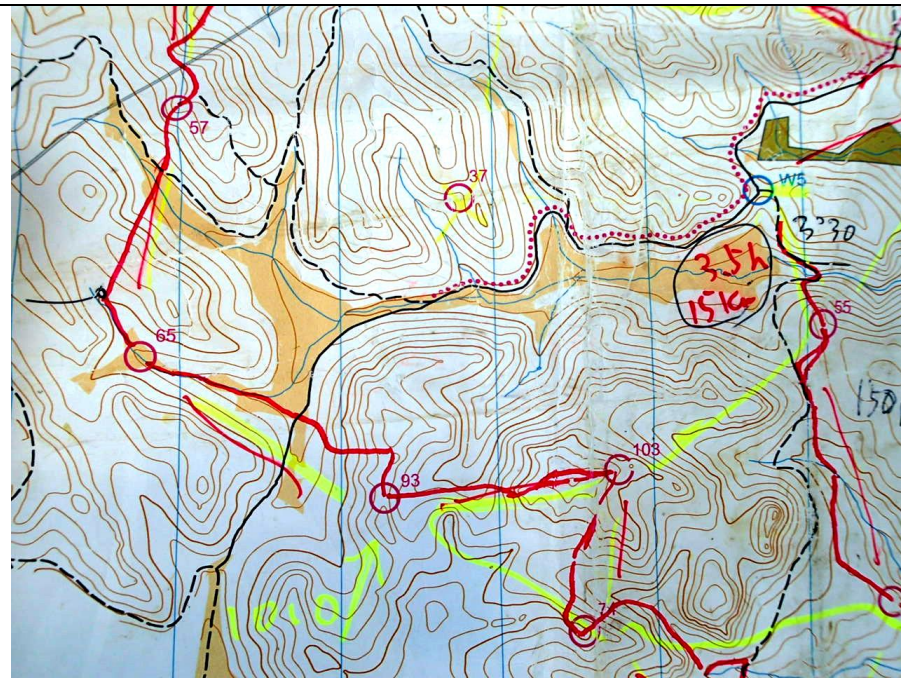
スタート時は、下にアンダー用長袖ポリシャツを着て、その上にラピッドシャツ、さらに薄手のウィンドブレーカーだったが、ウィンブレはすぐに脱いだ。8時になったら、ラピッドシャツ1枚で十分。



WSに3.5h、15kmの書き込みがあるここまではほぼ予定通りの進行。その後の85は、いちおう沢に描いてあるが、全く分からなかった。ただ直進はどんぴしゃり。歩測をしていないと、もしびたっと当たらない時にどうしていいか分からない。
91の地形ははっきりしているが、手前の尾根が思ったよりも広く、やや蛇行する。



90、尾根に上がればよいようだが、実際には2段階の段差になっており、不安がぬぐえず。とにかく北向きの斜面が出てくるまで上がればよいのだ、とロジカルに考えないと大変だった。58は簡単だが、谷底から150m登らなくてはならない。消耗した。このCPはパスして、69を経由して95にいくべきだった。102、95とも出入りになる。



すでに HH への帰還が 2 時すぎる可能性が濃くなったので、弱気になり、65 はパスしようかという話になったが、田島が強気で取りにいったこの後、日が暮れて、ナイトナビゲーションになる。

93、103、74 はこの日の核心。93 は簡単に見えるが、暗闇の中で外すとどうしようもない。多少無駄でも確実にエイミングオフ。獣道を見つけ、北に流れていることを承知で登り切る。近くにいた男子チームは我慢できず戻ってしまったが、私たちは十分エイミングオフを意識したので、南に進み続けることができた。また等高線が 1 本あるので、がっつり登りが始まるまでは進む、と考えて鞍部に到達。

103 はとにかく直進、そしてピークを捉え、そのまま東方向の尾根に進むというプラン。実際にはピークにあがるまでに岩壁が出てきたり、ピークもだらっとしていたり、かなり気を遣った。しかし山の北側にいれば、とにかく大きくくぐらないように東に進めば絶対に CP のある尾根に入るとロジカルに考え進み続ける。

74 もエイミングオフをして、尾根をたどる。登り方から、手前の鞍部にでるだろうと予想したら、その通りだった。



63 は、道がなかったことと、沢の中がラフで地図以上に曲がりくねっていた関係上、全く自信が持てなかった。歩測も相当多くなってしまったが、沢底を進むと一段ある台地によって尾根側の地形も見えず。諦めかけたが、斜面の方向は概ね東西に平坦に伸びていることから、63 の近くにいるとは考えられた。そして最初の南西方向の曲がりがあったので、少し戻ったところの斜面を一回だけ（約 10 分くらいの見積もり）見に行こうということになった。

くぼんだところを上があったが、何もなかった。少し左を上がっている田島が「あそこ光っているかもしれない」という。確かにそう思える。50m 以上の距離はあっただろう。反射板でなければ絶対に見つからなかった。

106 は、オリエンテーリングっぽいナビゲーションができる。手前の小さくくぼみを無視して、歩測で進み沢を捉える。

79 は斜面を 20m ほど斜めに下る注意を必要とする CP。ここは鞍部からかなり丁寧に歩測とコンパスワーク。左から張り出す尾根が捉えられ、歩測もドンピシャ。

このエリアは、CP が多く、時間を調整しながら最後に回るのははうってつけ。脚も疲れているなりに動けたので、時間は計算できた。概ね残り 1:45 なので、44 に向けて直行する必要はなく、61、51 と回れそう。そこで時間がなくなれば 23 のみ取ればよい。逆に時間があれば 32 > 23 と回れ、それでも時間があれば 44 にいけばよい。かなり自由自在に調整が可能。コントロール間のタイムを常に把握し、計算づくで 44 を取り、3 分前にフィニッシュ。

(村越 真)